いつもあなたのそばに…
アンテナ道民児連
Antenna
No.207

しあわせ・応援ネットワーク
道民児連

公益財団法人 北海道民生委員児童委員連盟
札幌市中央区北2条西7丁目北海道社会福祉総合センター4階
tel.011-261-2181　fax.011-261-3081
ホームページ http://www.dominjiren.or.jp
Eメール info@dominjiren.or.jp

特集 支え合いの拠点をどうつくる
～地域の寺院と大学による、新しい共有価値の創出～

クローズアップ「この人」……7
おすすめ書籍「ブックレビュー」……8
災害に備える
「③過去から学ぶ」……8

■写真「朝霧（富良野市北の峰）」
富良野市　田澤　豊氏

特集

支え合いの拠点をどうつくる

～地域の寺院と大学による、新しい共有価値の創出～

かつてお寺は、人と人が集まり、
地域に流れる時間と価値観を確かめる重要な共有スペースでした。
ところが、時代の流れと人のニーズの変化は、
そんなお寺の機能性を遠ざけてしまいました。

一方で、地域福祉の拠点づくりの必要性が
にわかに高まってきた現代、
地域の輪の真ん中にあった寺院を、
もう一度利活用できないかと模索する向きが現れました。
社会科学の研究者たちです。

ここでは実際に江別市内で行われた
コラボレーションの事例を通じて、
「居場所づくり」の意義を考えます。

子ども食堂に集まった児童

お寺に子どもの声が響く

江別市の中心市街地の一角にある眞願寺は、浄土真宗本願寺派の寺院。威厳ある立派な山門が目を引く、地域のランドマークです。

このお寺に、たくさんの子どもたちの歓声が響く日があります。およそ2か月に一度、「北翔大学 子ども食堂・地域食堂☆しんがんじ」が開催されるのです。

昭和の昔ならいざ知らず、平成、令和と時代が進むにつれ、お寺の境内で遊ぶ子どもの姿を見ることは、とても稀になってしまいました。ところが子ども食堂・地域食堂の開催日は、夕暮れと共に子どもたちが続々とやってきては、食事や遊びを楽しみます。その姿に昔も今も違いはありません。

小学生の多くがスマートホンを持ち、バーチャルのEスポーツに興じる現代っ子の姿は影を潜め、学年の垣根を越えてボール遊びや輪投げなどに興じます。

それを見守るのは地域の住民。自分の子にもよその子にも同じように接し、子どもが遊び終えると同じメニューで食事をします。今では失われた古き良き文化が、お寺の中で復活する夕べ。取材を行った日には、100名を超える参加者が集まっていました。この暖かな空間は、一体どのようにして始まったのでしょうか。

眞願寺山門

必然の邂逅

眞願寺の子ども食堂・地域食堂は、北翔大学生涯スポーツ学部健康福祉学科の尾形良子准教授が、眞願寺住職の石堂了正（せきどうりょうしょう）氏に協働を持ち掛けたことから始まりました。

石堂氏は江別市民児協で主任児童委員を担っています。普段より子どもからお年寄りまで、地域の人々に真っ向から向き合うことを実践してきた石堂氏にしてみると、尾形氏からのオファーは、まさに「必然の出会いだった」と言います。

一方の尾形氏は「研究するけれど現場でも働ける」ことを信条とする、アクティブなフィールド実践主義者です。客観性を担保するために並走観察にとどまりがちな従前の研究手法とは違い、戦略的に社会を科学しながらも、課題解消の手法をトライ&エラーで見出していく現代的な感覚の研究者と言えます。

尾形氏は自らが立ち上げた「支え合いの拠点（居場所）づくりの支援のための研究・実践グループ」による「北翔大学・子ども食堂と地域食堂プロジェクト」の会場兼担い手として、眞願寺に白羽の矢を立てました。

両者の邂逅は昨年。プロジェクトの内容をすり合わせて平成30年12月に最初の食堂を開催して以来、これまでの開催回数は6度を数えるようになりました。

開催日には、尾形氏が指導する学生たちが、ボランティアスタッフとして参画。子どもと一緒に遊んだり食事の支度をしたりと、与えられた役割に沿って仕事します。印象的なのは、それら学生の表情の明るいこと。尾形氏は「なかなか異世代と交わる経験を持てないのが現代。始めはプロジェクトを単なるカリキュラムの一環と捉えて参画する学生も、現場の空気を吸うとやっぱり刺激になるのだと思います」と言います。

一方の石堂氏は、食事の支度をする厨房から、子どもが走り回る本堂までをくまなく巡回しては、参加者やスタッフすべてとコミュニケーションを図ります。乳児を抱いた若いお母さんと親しげに話しているのを見て、檀家さんですかと伺うと、「いやいや、近所に住んでいる親子です。抱かれている子が生まれた

ころから顔なじみで」と笑います。

食事が佳境を迎えたのを見計らい、石堂氏の説法が始まります。それまで賑やかだった会場がしんと静まり、大人も子どもも石堂さんの語る言葉に耳を澄ませるさまは圧巻。人と人、人と地域の絆について穏やかに説くその内容はとても意義深く、参加者それぞれの解釈で深く意識に刻み込んでいるようでした。

子ども食堂と地域食堂

子ども食堂や地域食堂の取り組みは、近年全国的な広がりを見せています。これらは言い換えるなら、地域の居場所づくりの取り組みとも言えます。居場所づくりは「地域共生社会」の実現を可能とする手段のひとつとして位置付けられ、取り組み事例が加速度的に増加しています。

遊ぶ子どもたち

平成30年4月に発表された「こども食堂安心・安全向上委員会」の調査結果から、全国2、286カ所で子ども食堂が開設されていることが判明。道内でも約100か所で同様の取り組みが行われていると分りました。

「子ども食堂」について、明確な定義はありません。農林水産省は「地域住民等による民間発の取組として、無料または安価で栄養ある食事や温かな団らんを提供する」ものとしていますが、具体的な手法や制約、条件などの規定は定められていないのです。運営はボランティア方式などの市民活動が中心となっていますが、中には自治体が予算取りして事業化しているものもあるようです。

子ども食堂は共生食堂型とケア付食堂型に大別されています。共生食堂型とは、貧困家庭の子どもに限らず誰でも受け入れる食堂の形態。一方でケア付食堂型とは、個別の貧困問題に対応し課題解決を目指す食堂の形態をとります。とは言えども現在全国で拡がっている子ども食堂の多くは、いずれもこの2つに明確に区別されるものではなく、基本型は共生型でありながら、子どもを取り巻く環境を読み解くといった目的を持ったものもあるようです。

一方の「地域食堂」は、地域の誰でも利用可能であり、そこに集う人と人とがコミュニケーションを図りながら、比較的安価に食事ができることが特徴です。しかし、こちらは子ども食堂以上に厳密な定義はなく、実践事例の中にはコミュニティ・カフェなどと実質区別不能なものも含まれていると推察されます。また、全国でどれくらいの取り組み事例数があるかは、把握しきれていないとされています。

食堂を介したこの二つの取り組みは、地域福祉の実践拠点づくりとしての性格を持ったものであることは間違いありません。そのため、民児協活動や社会福祉協議会活動とも親和性が高いと言えます。実際に道内で展開されている事業の多くに、民生児童委員が何らかのかたちで参画しているものが少なくありません。

ボランティアが支える厨房

協働の意義とメリット（北翔G）

尾形氏が率いるグループは現在、眞願寺のほかに、市内野幌地区にある「八丁目プラザのっぽ」でも同様の食堂イベントを開催しています。こうした取り組みを推進する理由について、尾形氏は「世代を超えて地域の人々が集える居場所が、地域の中に必要だと考えたから。食堂は、その親和性が高い」と言います。

今日、地域課題は多様化かつ複雑化の一途をたどり、従来型の福祉サービスに依存するだけでは、住みよい地域を持続することが困難になってきました。住民が「住んで良かった」と感じる地域を創出するには、住民自らが参画する、福祉とまちづくりの仕組みが必要です。

現場で指揮をとる北翔大学・尾形良子氏

「当初は、徐々に参加者に役割意識が形成され、参加者も運営の担い手となってくれたらと考えていました。実際、参加者として食堂に来ていた住民がボランティアを申し出てくれたこともあります」。でもそれはほんの一握り。参加者の多くはサービスの受け手、つまり「お客様」としての意識から脱していません。同様に学生スタッフもまた、その境界を越えられていないようだと尾形氏。

「地域に密着する寺院であれば、より多くの住民参画の契機を見つけ出せる可能性があると考えました。そうした場所で学生が経験を積めることも、得難いチャンスに他なりません」。

野幌会場では地域の商工会と、考えを共有するネットワークができたと言う尾形氏。それは眞願寺でも同様ですが、何より民生児童委員を含む住民ボランティアが多数参画してくれる仕組みができたのは、寺院の求心力ではないかと言います。眞願寺では、有形無形の強力な福祉資源を確保できたことになります。

協働の意義とメリット（眞願寺）

一方で、眞願寺としてはどんなメリットを得たのでしょうか。石堂氏は、実に興味深い話をしてくれました。

眞願寺住職・石堂了正氏による説法

「かつて寺院は、地域における重要な集いの場として機能していました。宗派を超えて人々が集まり、共に喜んだり悲しんだりしながら時間と時代を共有していたものです」。そうした寺院の役割は、年を追うごとに希薄になっていきました。人々の意識がより個人主義的になり、相互不干渉が尊重される世相が拡がるにつれ、地域と寺院のつながりは薄らいだのです。

かつて寺院の境内は、近所の子どもたちの格好の遊び場でしたが、屋内での遊びに関心が移るにつれ、子どもの姿は減っていきました。大人はおろか、子どもでさえお寺に集うことの意味を失ったのです。

「寺院は宗派に関わらず、地域から愛されなければなりません。それは倫理や文化、平和や愛情といった、人にとって不可欠な心を共有する空間だからです。かつてのお寺はそうした空間として、自然発生的に地域の人々に認識されていました。私たち宗教家は、今こそそうした寺院の在り方を問い直すべきだと思うのです」。

地域社会が抱える課題は、時

代と共に変化します。その変化に伴い、社会のニーズも変化します。だから「お寺が新しい共有価値を生み出して、あるいはその価値観の実現の場として、地域の人々に受け入れてもらうことが必要」と石堂さんは言います。

「新しい共有価値の創造」とは、世界の持続可能性を本気で考える進歩的事業者が、近年その理念に象徴的掲げる考え方、もしくは言葉です。CREATIVE SHARED VALUEの頭文字を取って、CSVと呼ばれます。

その精神は、自社だけが潤えば勝ちという従来の企業成長戦略ではなく、自らが仕事をすることによって、地球環境から健康・福祉、教育や人権など、人類が抱えるあらゆる共通課題の解消に効果が発揮できることこそが、事業家に課せられる使命だとします。

石堂さんが語った寺院の「新しい共有価値」とは、奇しくもCSVと同義と言えるのではないでしょうか。「宗門では、あらゆる世界に生きるすべての生命が、分け隔てなく救われていくと導かれます。今は狭義の宗論に固執するのではなく、すべての生命を尊ぶという基本理念に立ち返って、地域の寺院の存在意義を組み立て直す時です」と石堂さん。その言葉には、地域の中で人々の拠りどころ、居場所となろうとする、良い意味での寺院の戦略が窺えます。

むすび

行政サービスの行き先に限界が見え始め、未来に対する不透明感と不信感が濃度を増す現代。こうした時代において、住民自治はますます重要なキーワードとなってきました。

住民自治の担い手は、住民自身であることは疑いようがありません。そしてそれを促すためには、それが機能する仕組み＝ガバナンスと、拠点となる場所を用意する必要があります。

ちょうどこのプロジェクトがスタートしたころ、NPO法人「人間の安全保障」が、都道府県別に取りまとめた住民の幸福度指数を発表しました。この指数によれば、北海道は全国ワースト5。つまり、北海道の住民は、不幸感を抱く人が相対的に多いことになります。

また、同法人は、孤独感のランキングも公表しました。こちらでも北海道は、孤独感が深い住民が最も多い地域グループに分類されています。

長い冬の間雪に閉ざされること、僻村が多いこと、そして所得水準が低いといった北海道の特徴が指数に影響しているかもしれませんが、要因はそれだけではないはずです。

人々が抱く不幸感の原因を推察し、特定する作業は大切です。しかし一方で、その原因をすべて排除することができるかは別の問題。ならば、問題究明と並行して、今ある課題を、着手できる部分から補完していくことも大切なはずです。

眞願寺と北翔大学のコラボレーションは、住民参画による地域福祉の重要な「装置」を誕生させたモデルケースと評価できるのではないでしょうか。

失われた人と人との結びつきを取り戻す装置として、子ども食堂・地域食堂は重要な場です。同時にそこは、地域に暮らす人々が、自身の手で暮らしの持続性を担保する場でもあるはずです。

さて、こうした重要な局面に、民生児童委員がどう関わっていくか。そのあり方が問われています。

受章おめでとうございます

［令和元年 春の褒章・叙勲］

令和元年度、秋の褒章・叙勲で、受章された民生委員児童委員の方々をご紹介します。

（敬称略）

●秋の褒章叙勲受章者

褒章受章者

◇藍綬褒章

新谷　則（函館市　元）
伊藤　欣也（北見市　現）
松井　元（芦別市　現）
渡邉　曌子（上川町　元）

叙勲受章者

◇瑞宝双光章

三原　忠（北見市　元）
髙橋　勝（稚内市　現）
石澤　淳子（美幌町　現）
渡部　徳樹（中標津町　現）

◇瑞宝単光章

大野　秀樹（稚内市　現）
浦野　信子（砂川市　元）
片岡　槇子（石狩市　元）
岡本　克也（奈井江町　元）
伊藤　二三（島牧村　元）
岩本　守（仁木町　元）
廣田　ミヱ（利尻富士町　元）
小林　壽幸（音更町　現）